

生誕150年のホルストとイギリスの作曲家たち

プログラム

今年近代イギリスを代表する作曲家のひとり、ホルストの生誕150年に当たります。ホルストと言えば「ジュピター」と即答するほど、吹奏楽やジャズへの編曲版、歌詞が付けられ平原綾香が歌ってヒット曲になるなど、多くのアレンジでこの曲だけが一人歩きしていますが、元は7曲からなる組曲「惑星」の第4曲です。終曲の「海王星」では女性合唱が入り、色彩的な管弦楽法による傑作を全曲通してお楽しみください。後半はイギリスの作曲家たちの最も良く知られた作品を集めてお送りします。エルガーは、ヘンリー・パーセル(1659~1695)以来不毛だったイギリス作曲界を初めて国際的な地位に高めた作曲家とされています。変奏曲「謎」(エニグマ変奏曲)や天才チェリスト、ジャクリーヌ・デュ・プレが世に広めたチェロ協奏曲等、多くの名曲を残しましたが、今日は最もポピュラーな行進曲「威風堂々」をお聴きください。ヴォーン・ウィリアムズは40歳近くになってから主要作を書いた大器晩成型の作曲家で、自国の民謡や伝統音楽、印象派の影響などを統合して個性的なスタイルを確立、多彩な表現力を持つイギリスを代表する作曲家のひとりです。「タリスの主題による幻想曲」は出世作となった名曲です。フィンジは音楽辞典にも載らないほど知名度の低い作曲家ですが、イギリス音楽好きの間では大変人気のある作曲家です。絶滅種のリンゴを救う栽培家として働きながら作曲を続けた異色の経歴を持っていますが、美しさと優しさ、そして心に響く音楽を書いた作曲家です。「落ち葉」はそんな思いを感じさせてくれる佳曲です。ブリテンは、保守的な伝統を守りながらも現代感覚を折り込み、密度の高い表現を追求し、20世紀イギリス最大の作曲家とされています。指揮者、ピアニストとしても活躍、1956年には来日してN響を指揮しています。「青少年のための管弦楽入門」はブリテンの最も有名な作品です。(中川)

グスターヴ・ホルスト (1874~1934) :

組曲「惑星」 Op.32

1. 火星 ~戦争をもたらす者~
2. 金星 ~平和をもたらす者~
3. 水星 ~翼のある使者~
4. 木星 ~快楽をもたらす者~
5. 土星 ~老いをもたらす者~
6. 天王星 ~魔術師~
7. 海王星 ~神秘なる者~

大植英次指揮ハノーファー北ドイツフィルハーモニー管弦楽団/ハノーファー女性合唱団
(2008.4.11 ハノーファー、グランド・スタジオでのLive)

*** 休憩 ***

エドワード・エルガー (1857~1934) :

行進曲「威風堂々」第1番二長調 Op.39

ネーメ・ヤルヴィ指揮ロイヤル・スコティッシュ・ナショナル管弦楽団
(1987.10.4 サントリーホールでのLive)

レイフ・ヴォーン・ウィリアムズ (1872~1958) :

タリスの主題による幻想曲

オイゲン・ヨッフム指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1972.3.2 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

ジェラルド・フィンジ (1901~1956) :

落ち葉 ~オーケストラのためのエレジー(悲歌)~ Op.20

レナート・スラトキン指揮BBC交響楽団
(2001.9.15 ロンドン、ロイヤル・アルバートホールでのLive)

ベンジャミン・ブリテン(1913~1976) :

青少年のための管弦楽入門 ~パーセルの主題による変奏曲とフーガ~ Op.34

ネヴィル・マリナー指揮シウトウツガルト放送交響楽団
(1994.12.9 シウトウツガルト・リーダーハレ、ベートーヴェンホールでのLive)

曲目解説

ホルスト：組曲『惑星』Op.32

グスターヴ・ホルストは1874年9月21日、イングランド、チェルトナムに生まれました。父はスウェーデン人の音楽家で、ホルストの家系は3代にわたる音楽一家でした。幼い頃から父に音楽を学び、村のオルガニストとして音楽家生活を始めますが、19歳のときにロンドンの王立音楽大学に入学して、チャールズ・ヴィリアーズ・スタンフォードのもとで学びました。1895年、21歳の時に同郷のヴォーン・ウィリアムズと出会い、生涯の友人となりました。ふたりは互いに影響し合い、成長しながら作曲活動を続けて行きました。1907年から1924年にかけてはモーリー・カレッジの音楽科主任、1906年から終生セント・ポール女学校の音楽科主任を務め、教育面での功績も残しましたが、1934年5月25日、ロンドンで59年の生涯を閉じました。組曲『惑星』は1914年に着手し、1916年に完成、初めは「海王星」はオルガンのために、他の6曲は2台ピアノのために作曲され、1917年にオーケストレーションがなされ、今日の作品として完成しました。曲は「惑星」を題材にしていますが、天文学ではなく占星術から着想を得たもので、ホルストは占星術の手解きを受け、占星術における惑星とローマ神話の対応を研究していました。彼はこの組曲について「これらの曲は惑星にまつわる占星術的な意義を示唆していて、標題音楽ではありません。また、同じ名前の神話の神とも関係がありません。しかし曲に対する何らかの案内が必要なら、各曲の副題が広義に用いられても良いでしょう」と述べています。初演は1918年9月29日、エドリアン・ポールの指揮で私的に行われましたが、1919年2月27日の公開初演では「金星」と「海王星」を除く5曲がポールの指揮で行われ、1920年11月15日に、アルバート・コーツ指揮ロンドン交響楽団によって、ようやく全7曲の初演が行われました。組曲『惑星』はホルストを代表する名曲として親しまれています。

エルガー：行進曲『威風堂々』第1番二長調Op.39

エドワード・ウィリアム・エルガーは1857年6月2日、イギリス中西部ウスター近郊のブロードヒースで生まれました。父は教会のオルガニストで、ヴァイオリンもプロ並みの腕前でした。彼も8歳までにはヴァイオリンとピアノのレッスンを受け、父に連れられてその技量を披露する機会を得ていました。作曲はほとんど独学でしたが、10歳の頃にはすでに劇音楽を作曲していました。1892年、35歳の時に書いた「弦楽のためのセレナード」が最初の優れた作品として認められ、1889年に結婚するアリスへの贈り物として彼女に捧げた小品「愛の挨拶」を経て、1899年42歳の時に作曲した「エニグマ変奏曲」の成功によって、エルガーの名声は不動のものとなりました。行進曲集「威風堂々」は1901年から1907年にかけて5曲作曲され、第1番は1901年に作曲、同年10月19日にアルフレッド・ロードウォルド指揮リヴァプール管弦楽団によって初演されました。後日エドワード7世からトリオ部分に現れる崇高雄大な旋律に「歌詞を付けたら良い」との勧めを受け、エルガーは国王の戴冠式を祝う合唱曲「戴冠式頌歌」の終曲「希望と栄光の国」にこの旋律を用いて大成功を収めました。「威風堂々」の原題はシエイクスピアの戯曲「オセロ」第3幕第3場の台詞「輝かしい戦いの盛儀盛宴」から採られています。1938年のレコード目録には「威風堂々たる陣容」と訳されていて、後年これが「威風堂々」と縮まったと思われる。「プロムス(プロムナード・コンサート)」で演奏されるのが定番となっている、エルガーの最もポピュラーな名曲です。

ヴォーン・ウィリアムズ：タリスの主題による幻想曲

レイフ・ヴォーン・ウィリアムズは1872年10月12日、イングランド、グロスターシャー州ダウンアンブニーで生まれました。牧師であった父は3歳の時に他界、6歳の頃、叔母から音楽の手ほどきを受け、7歳からヴァイオリンを習い始めました。1890年、18歳のときにロンドンの王立音楽大学に入学、チャールズ・ヒューバート・パリーに作曲を学び、ここで生涯の親友ホルストと出会います。ヴォーン・ウィリアムズは遅咲きの作曲家で、30歳になった頃出版された歌曲が最初の作品でした。しかしその後、38歳で交響曲第1番「海の交響曲」、代表作の一つである交響曲第5番は71歳、最後の交響曲第9番は86歳の時に書き上げ、1958年に亡くなる直前まで精力的に作曲活動を続けました。「タリスの主題による幻想曲」はスリー・クワイアーズ・フェスティバルに出品するため1910年に作曲、その年の9月6日にグロスター大聖堂において作曲者自身の指揮と、ロンドン交響楽団員の演奏により初演されました。トーマス・タリス(1505~1585)は「イギリス教会音楽の父」と呼ばれる16世紀の作曲家で、原曲はカンタベリー大主教のために捧げられた「詩篇」の第3番のフィギリア旋法の旋律からとられていて、弦楽四重奏と弦楽合奏に分かれた2群の弦楽オーケストラが楽想を発展、変形させて行き、強力なクライマックスを築き上げます。ヴォーン・ウィリアムズの出世作となった名曲です。

フィンジ：落ち葉 ~オーケストラのためのエレジー(悲歌)~Op.20

ジェラルド・フィンジは1901年7月14日、ロンドンに生まれ、1956年9月27日に55歳で亡くなったイギリスの作曲家で、父親はイタリア系、母親はドイツ系、どちらもユダヤ人でした。作曲家フランク・ブリッジの親友アーネスト・ファーラーに音楽を学び、その後オルガニスト兼合唱指揮者のエドワード・ベアストウの指導を受け、本格的な作曲活動を始めました。引き合わされたヴォーン・ウィリアムズの推薦で、1930年から1933年まで王立音楽アカデミーの講師となったフィンジでしたが、結婚を機にパークシャーの田舎、オールドボーンに落ち着き、作曲とリンゴ栽培に明け暮れるようになりました。オールドボーンでは絶滅の危機にあるイングランドの多数の品種のリンゴを栽培し保存に努めました。1939年、そうした仕事の合間に書かれた作品の一つがこの「落ち葉」です。比較的小編成のオーケストラのための曲で、イギリスの民謡のような優しいメロディーが抒情的に流れ、20世紀の前衛的な響きとは無縁の空間が広がります。もつともつと聴かれても良い魅力的な作曲家です。

ブリテン：青少年のための管弦楽入門 ~パーセルの主題による変奏曲とフーガ~Op.34

ベンジャミン・ブリテンは1913年11月22日、歯科医の父とアマチュア・ソプラノ歌手の母のもと、イングランド東部のローストフトに生まれました。7歳からピアノを習い始め、同時にピアノ曲を作曲するほどの才能を示していました。1930年、奨学金を得てロンドンの王立音楽大学に入学、作曲をジョン・アイアランド、ピアノをアーサー・ベンジャミンに師事しました。1934年卒業直前には「シンプル・シンフォニー」という名曲も生み出されていますが、1937年に作曲された「フランク・ブリッジの主題による変奏曲」の成功によって国際的な名声を得て、保守的な作風の中に、過度の現代感覚を盛り込んだ多くの名曲を残しました。「青少年のための管弦楽入門」は1945年にイギリス政府の教育用映画「管弦楽の楽器」の制作にあたり、その委嘱によって作曲され、1946年10月15日にマルコム・サージエント指揮リヴァプール・フィルハーモニー管弦楽団の演奏で初演されました。パーセルの主題は劇音楽「アプデラサル」からのロンドの主題が使われており、各楽器の特性を巧みな変奏で紹介したあと、壮麗なフーガで結ばれます。ブリテンの最もポピュラーな名作です。